「文化」と多層文化

村越行雄

「文化」という言葉は、最近よく耳にし、またよく目にする言葉ですが、そこに何を見出すことができるのでしょうか。国別に、地域別に、人種別に、民族別に、宗教別に、宗派別に、性別に、時代別に、年齢層別に、その他にも、私達が考えられもの全てについて、「文化」という言葉が使用されているのです。欧米語における「文化」という言葉の使用について見ると、長い歴史の中で実に様々な変遷を経験し、その定義も多岐にわたるものであることがわかります。そのことは、日本での「文化」という言葉の使われ方に関する現状を知る上で、必要不可欠な歴史的背景の知識となるものであると言えます。欧米の影響を受けて、文化に関する定義は、今まで様々な形で提出されてきましたが、ありとあらゆるものに、「文化」という言葉が使用されている現状を考えると、「人間の営み全般」という曖昧な捉え方をするしかないのかもしれません。文化の定義はともかくとして、「文化」という言葉が多用されるのには、それなりの意味があるはずです。

例えば、「日本文化」、「アメリカ文化」、「中国文化」などの国別の文化、「都市文化」、「下町文化」、「東北の文化」などの地域別の文化、「黒人文化」、「白人文化」などの人種別の文化、「スラブ文化」などの民族別の文化、「イスラム文化」、「仏教文化」などの宗教別の文化、「カソリック文化」などの宗派別の文化、「女性文化」などの性別の文化、「縄文文化」、「江戸文化」などの時代別の文化、「若者文化」、「老いの文化」などの年齢層別の文化だけでなく、「食文化」、「アニメ文化」、「笑いの文化」、「職人文化」、「生活文化」、「占い文化」、「ラーメン文化」など、また「紅茶の文化史」、「台所の文化史」、「痛みの文化史」、「下着の文化史」など、その他にも、何にでも「文化」を付けられるほど、多種多様であると言えます。そのことは、「文化」という言葉を使わずに、別の言い方が可能であるものも多くあることを暗に示していると言えます。もし別の言い方が可能であるにもかかわらず、あえて「文化」という言葉を使用するのであれば、「文化」という言葉自

体に対して人々が抱く、その時代や地域に特有の響きやイメージがあるはずです。

「文化」という言葉の最近の多用には、勿論単なる流行で、それほど深い意味もなく使用されている場合も多くあると思われますが、単なる流行として片付けるのではなく、そこに何があるのかを問わなければならないでしょう。「文化」という言葉の多用の現状には、複雑に入り組んだ諸要因があるはずで、それらの詳細な解明なしには明確にできないと言えますが、ここでは一つの可能性として何が考えられるかを試みたいと思います。

私たちは何かに所属している訳ですが、人々をどこに所属しているかで区分けする時、従来は国家、人種、民族、宗教などで区分けしていたように思われます。実際、今でも継続的に行われています。しかし、歴史が語っているように、私たちの歴史は、国家間の戦争であったり、人種差別による矛盾・対立であったり、民族間の争いであったり、宗教間の戦いであったり、戦いの歴史であったと感じられるものでした。まさに、国家間、人種間、民族間、宗教間などの政治的、軍事的な問題であったと言えます。国家を例にとれば、幾度となく戦争が繰り返されてきたことは誰でも知っていることですし、人種間でも、偏見と差別が絶えず争いを生んできましたし、宗教の間でも、対立から戦いへと進むことが何度となくあったことは、誰も否定できないことです。

戦いの歴史とも言える状況に対する反省でもあり、反発でもあると言えますが、「国家」、「人種」、「民族」、「宗教」などといった言い方に含まれる政治的、軍事的な意味合いを避けることがあって、「文化」という言葉が、そのような政治的、軍事的な争いを示さず、むしろそれを否定するような意味合いで、多用されてきたとも言えます。もしそうであれば、「文化」の多用の傾向は、国家、人種、民族、宗教などに見られる矛盾・対立・戦いという構図を避けて、否定することの反映であると解釈できるでしょう。それは、まさに現在の日本が求めて、期待していることの現われです。

最近の「文化」の多用が、今の日本人の欲求・期待の現われであると考えると、必ずしも必要と思えない場合でも、何に対しても「文化」を使用することが、「文化」自体が持つ響きやイメージを利用・活用するためのものであったことが明らかになってきます。そして、文化に関する定義そのものに直接関係するとは必ずしも言えず、それだけにその言葉の使用範囲が拡大し、極端な言い方をすれば、無限に広がっているとも感じられる訳です。ただ、矛盾・対立・戦いを避ける意味合いで「文化」を使用する場合、本来それを本質的な特徴とするケースや、それとは全く関係ないケースでは、オブラートに包んで、曖昧にするだけでなく、それ以上に、言葉の誤用、さらには悪用となってしまうでしょう。

次に、文化が複雑に絡み合っていることを見ていくことにします。文化は、幾つものものが関わりあって存在している訳で、典

型例としてよく挙げられるのがアメリカです。多人種国家、多民族国家、多文化国家であるアメリカの場合、アメリカ文化と言っても、決して一様で、同質的であるのではなく、アメリカ国籍を取得した、様々な民族の移民者は、自らの民族の文化を捨てることなく、伝統的に継承しており、それらの総体としてアメリカ文化があるのです。しかも、各民族の文化だけでなく、各人種（アジア系、アフリカ系、ヨーロッパ系など）の文化、さらに各宗教（キリスト教、仏教、イスラム教など）の文化も継承しながら、アメリカ文化を作り上げているのです。勿論、多民族からの移民者を構成員（国籍を取得した国民）とする国家は、アメリカ以外にもたくさんあります。

また、仕事、研究・勉強、その他の理由で、ある共同社会の一員として（短期滞在か、長期滞在かは別にして）、その国の国籍は取得していないが、生活している外国の人は多くいます。東京を例にとって見れば、世界中の国々から来日して、私たちと生活を共にしている人は、近年増加傾向にあると言えます。そして、東京に滞在している外国の人々は、それぞれの国の文化を持ち込み、保持しながら生活しているのです。そこには、日本以外の国々の文化が強い影響力を持ちながら、日本文化と共に存在している姿が見られるのです。

上記の二つは、異文化に関連するものです。それだけでなく、自文化の中でも、多くの文化が様々に関わりあっているのです。例えば、地域別による文化の相違を見れば、関東と関西では文化は異なり、関東でも東京と神奈川、埼玉、千葉などでは文化は異なり、東京でも23区とそれ以外の郊外とでは文化は異なり、23区でも下町と山の手では文化は異なり、23区の中でもそれぞれの区では文化は異なり、さらに区の中でも場所によって（例えば、台東区の中でも、浅草、上野などでは異なる）文化は異なるという具合に、地域別による文化の多様性は明らかになってきます。地域以外にでも、文化の多様性を見出すのは容易でしょう。

異文化間でも、自文化内でも、幾つもの文化が複雑に絡み合っており、多文化は、異文化間だけでなく、自文化内でも重要な特徴となっているのです。しかも、複数の文化は、バラバラに存在しているのではなく、それぞれの存在意味を持ちながら、互いに有機的に関係しあっているのであり、それぞれの意味に応じて、幾つかの層を成して存在しているのです。つまり、文化は、多様性だけでなく、さらには多層性を主要な要素としており、その意味で、ただ単に多くの文化が関係しあっていることを明らかにするのではなく、複数の文化が相互にどのように関係しあって、どのように層を成しているのかが問題で、そのメカニズムを明らかにすることが重要になってくるのです。

文化の多層性は、異文化間でも、自文化内でも、いずれでも見られる特徴であり、異文化、自文化を共に含む全体のメカニズムの解明こそが大きな意味を持ってくるのです。そこで、私たち一

人一人の個人が重要な鍵となってきます。文化は、勿論私たち人間個人が根底にありますが、従来は外側から見てきたのであり、例えば、国家、人種、民族、宗教など、集団組織から見てきたのです。しかし、人間個人から見ていく必要があり、内側から見ていくことの重要性が認識される必要があります。

例えば、日本文化やアメリカ文化などのように、文化全体を比較する比較文化論よりも、そのような文化的背景を持つ個人同士の関わりを扱う異文化コミュニケーション論の方が最近注目されているのは、それなりの理由があると言えます。さらに言えば、異文化的背景を持つ個人同士だけでなく、同一の自文化内での個人同士の関わりをも含めて、個人レベルの対人コミュニケーション論が注目される意味は明らかでしょう。多層文化の体現者としての個人が果たす役割の解明は、現代的課題となっています。

多層文化の特徴を外的視点からだけでなく、内的視点からも見ていくことは、今の私たちにとって必要なことです。ある日本人が、日本国内で長年生活してきた中で、多種多様な文化に所属したり、接触したりすることで、さらに外国での生活で、多種多様な文化に所属したり、接触したりすることで、それらの総体として、多層文化の体現者として、別の日本人あるいは外国の人とコミュニケーションをする訳で、そこにコミュニケーション（非言語コミュニケーションをも含む）と多層文化の関わりがはっきりと見えてきます。私たち一人一人が、自文化であれ、異文化であれ、どのような文化に所属し、どのような文化に接触し、どのような形で影響を受けて、どのような形で受け入れたかによって、それぞれ異なってくるのであり、そのような個人同士がどのような状況や環境の下でコミュニケーションをするのかを解明することは、外的視点からでは見つけられなかった点が浮き彫りにされ、内的視点の利点が明らかにされることにつながるでしょう。

今回は、「文化」という言葉の多用の現代的意味、そして個人レベルの多層文化について、ごく簡単に見てきました。その為に、複雑に絡み合う諸要素については言及できませんでした。最後に、それほど簡単で、単純なテーマではないことだけを述べて終えることにします。